

骨子とし、これに他の説話的要素を結合して、筋の発展と複雑化とを企て、しかもそれを一つの物語として統一しようとする方法をとらえる。あわせて作者の狙いとして消閑息慰のすさび、勸説教訓、現実的精神、諷刺と諧謔を見る。方法論とモチーフ論、状況論が必ずしも統一的にとらえられていないうらみがあるが、やはり構想・方法論の第一歩たりえている。統いて構成の様式や、趣向・モチーフの有無によって小説の分類を試み、あわせてその創作の具体に文学を見られる、正統的な作品論の先どりをなすものと言えるが、今後、この分類を踏まえた立体的な作品論が課題となろう。この期の小説に顕著な類型性を、創造力の減退と見ておられるが、語り物にも通底するこの様式性の評価についても、やはり今後の課題である。

これを要するに、先生のお仕事は、まず作品の文体や構想を、つとめて形態論的にとらえ、分類するという方法で貫かれていく。そこに、今から思えば、見て来たような斬新な方法の先どりのあることに気がつく。この姿勢が『平家物語評講』の解説となつて結実している。いずれかと言えば潔癖に過ぎる姿勢が目につくけれども、その方法上の成果を踏まえてこれをどのように現代の批評に生かして行くかが、われわれ世代の課題となるであろう。書評の形を借りて、佐々木先生のお仕事に、わたくし自身の指針を仰ぐことになってしまった。故き先生の御冥福をお祈りする。

(昭和56・10 明治書院刊 A5判 三七六頁 五八〇〇円)

青山忠一氏著『仮名草子女訓文芸の研究』

野 田 寿 雄

近時、西鶴以前の仮名草子の研究がさかんになり、精細な論考が発表せられるようになったことは慶賀に堪えないが、この度青山忠一氏の『仮名草子女訓文芸の研究』の発刊を見たことは、その仮名草子研究の一布石として注目値する。

多くの特色を持つ仮名草子の中で、女訓物すなわち女性のための教訓書という系列のあることはすでに知られているものの、その女訓物にはじめて真向から立ち向った著者の勇氣にまず敬意を払わなければならないと思うが、とくに「女訓文芸」というふうには絶えずその文芸的価値を念頭に置いて個々の作品の精査をされたことは、たんに作品の紹介に終るというのではなく、新しい視点の設定として評価されるべきであらう。

仮名草子の女訓物として、もっとも古いものでは、古活字本の形態を持つ「めのとのさうし」(慶長ごろ)「女訓抄」(寛永一四版焼失、寛永一六版現存)、写本の形態を持つ「女郎花物語」(万治四版とは別、室町期成立か)があるが、やはり刊本を中心として考えなければならない仮名草子としては、「めのとのさうし」「女訓抄」が重要であらう。「めのとのさうし」(上巻めのとのさうし、下巻女訓集)については、青山氏は「前代の末に行なわれていた」(七ページ)と簡単にしか触れておられないが、確かに

上巻は宮廷の女官または上流婦人の日常の心得を説いたもので、「御くわほういみじくて御さいはひありて女御きさきの御くらゐにたち給ひ候はば、いよ／＼うへをしつし参らせ、御身をひげし給ふべし」といった語は、一般庶民と関係が無く、前代的とも言えるが、下巻の「女訓集」になると、ぐっとくだけ、「家職」「知音」「神主」「禄」といった近世語が統全し、また「いろは歌」の教訓、「出雲ことば」「あしきふるまひ」「よろしきしな」など卑俗な段の多いことから、少くも「女訓集」は近世の補足と考えられなければならない。もっとも全体に教訓語ばかりであって、必ずしも文芸的とは言えないかも知れないが、「長者教」と同じく近世教訓書のはしりと見れば、これを抜きにして女訓物を論じるのは、やや物足りなさを感じる。

これに対して、後の「女訓抄」は、構成や内容、また説話の豊富において、見事なものであって、まさに青山氏の言う「女訓物の権与」と言えるものであろうが、氏はこれを第一類の「仏教思想を中心として日本的な紫の上を理想とするもの」に分類している。しかし、例話には「孝経」や「二十四孝」を引き、また李夫人・貞女・王照君などの中国説話をかなり採り入れているところを見ると、儒教の影響も少なからずあって、必ずしも紫の上のみを理想としているわけではない。もちろん仏教思想の濃厚な点は、氏の指摘の通りであるが、紫の上を理想とするのは、むしろ「めのとのさうし」の方であると言ってよい。

さて、はしなくもここに、女訓物の二つの類型が成立する。すなわち「女訓集」のたんなる教訓書と、「女訓抄」の説話を豊富

に採り入れた文芸的傾向の書の二つである。前者は、その後「女鏡秘伝書」(承応二)「女諸礼集」(万治三)を経て、元禄期の「女用訓蒙図彙」「女重宝記」などの実用書に続き、後者は、青山氏が始めて検討を加えた中江藤樹の「鑑草」(正保四)を経て、中国種の原典の翻訳である「仮名列女伝」「女四書」の説話本位の書の出現に拠る賢女ばなしの流行に発展してゆく。

前者の実用書はともかくとして、説話本位の後者は、文芸書として扱い得るものである。当然そのきっかけとなった北村季吟の「仮名列女伝」(明暦二)辻原元甫の「女四書」(明暦二)の検討が必要になってくるが、まず「女四書」の方について言えば、青山氏の検討は、氏の架蔵の完本を底本として、中国原典との対比、翻訳の仕方などについて委曲を尽し、まことに間然するところが無い。しかも、「元甫の原撰に対する態度が、必ずしも正確な和訳を期待するよりも、内容をより明快に具体的に表現して、その教訓の志を顕現しようとする志のあらわれと見ることが出来る。そこには無意識のうちに一種のフィクション化、文芸性への志向を見出すであらう。未だ充分でないにせよ、自らも意識せぬうちに働いている」(一九九ページ)といった指摘は、当時の翻訳の態度を象徴したものとして賛同に値する。ところが、「仮名列女伝」については、これが「女四書」よりも先行し、しかも後世への影響力大であったにも拘わらず、ごく短くしか触れていないのは、何といっても解せない。もちろん氏は、「本篇の文芸性や説話性を論ずることは、自ずと原撰の評論を行なうことになる」(二〇九ページ)と言って内容の批評を避けたのであるが、

ただ翻訳の仕方に触れて終るのではなく、この作が後の賢女説話のきっかけとなったことを考慮すれば、百二十四話の一々の説話についてもその後の影響を挙げてもらいいたかつたし、なお欲を言え、原典の「列女伝」が中国においてどのような背景で生れて来たか——多少中国文学の分野に踏み入ることになるが、私はかつて「棠陰比事」についておこなつた——という点や、国文学者の季吟がなぜ中国書に興味を持ったかという点も、是非触れてもらいたかつたと思う。翻訳の仕方についても、原典に忠実で言うことがないだけでは、何かくだけた「女四書」の方が「仮名列女伝」より文芸的価値があるように誤解されかねないであらう。「仮名列女伝」の文学史上の位置をもつと視点に入れて、問題にしてみらいたかつたと思うのである。

「女郎花物語」(万治四)も季吟作と考えられるが、写本「女郎花物語」とこの刊本との違いは、すでに諸氏によって指摘されて来た。青山氏もそれを受けて、写本と刊本との違いを丹念に考察しているが、「仮名列女伝」を経た上での「女郎花物語」の季吟の執筆を、その関連で考え、また両者とも出版者中野小左衛門の依頼によると結論したのはおもしろいと思う。しかし刊本「女郎花物語」の意義は、先行の「仮名列女伝」をはじめ「女四書」「堪忍記女鑑」が中国の賢女烈女に重点を置いたのに対し、日本女性の逸話にもかなり重点を置いたという意味で、のちの「本朝女鑑」への道を拓いた功績があるのであって、その点をもっと強調すべきではなかつたかと思う。全体に儒教的色彩はあつても、その辺に季吟の面目があつたのではなかつたか。

本書には、なお「女仁義物語」(万治三)「本朝女鑑」(寛文二)「賢女物語」(寛文九)「女五経」(延宝三)「名女情比」(延宝九)が取り上げられている。それぞれに精査があり、まことに結構であるが、ただこの中で「本朝女鑑」は大作であり、意欲的な作品なので、むしろこれに重点を置く必要もあつたのではないかとと思われる。この作には、もちろん「女郎花物語」や、漢文体の「本朝列女伝」の影響があり、当然その比較が問題になってくるが、青山氏はあまりそれには触れず、もっぱらこれを浅井了意の作ではないかとして、説話の扱い方、叙述の仕方に力点を置いたので、何か文学史的な意味でのこの作の地位がばやけてしまった感がある。「本朝女鑑」の意欲は、やはり「本朝」というところにあるのであって、「仮名列女伝」の中国賢女に対する日本賢女の列伝を意図し、その意味では古代から中古中世に及ぶ八十五名の日本女性の探索をおこなつたのは、中国に対する日本意識の発生として注目されるのである。もちろん氏の指摘した「女式」には、中国女性も含まれるという不統一があるにしても、「賢明」「仁智」「節義」「貞行」「弁通」の五徳目に挙げられた女性はずべて日本女性であつて、これだけの女性を探索したというのは、やはり相当の博識と努力の結果と評すべきではなかつたか。そう考えれば、その努力に対し、煩瑣かも知れないが出典考を挙げるとか、一々の女性に対する作者の態度を解明するとかが、不可欠になってくるであらう。残念である。

「女仁義物語」「賢女物語」「女五経」も、氏によってはじめて試みられた論である。この中で「女五経」は、寛文十一年が初出

かも知れないが、前半は中世風の物語を採り入れ、後半は中国の賢女を列伝式に並べるといふ不統一の作品であつて、必ずしも重要な作品とはいへないものである。しかし、この作は意外に読まれており、延宝期に何回も再版されているので、何か時好になつたものがあるはずであり、よく読んでみると、当時の女訓書の総決算といふべきところもあるのである。「春秋」として物語

の導入部があり、つぎに「詩経」として女主人公の口を通しての賢女の例え話、そして「礼記」として女性のたしなみでしめくくり、「みちをおしあたるさうしには、まづ堪忍記、智恵鏡、女四書、本朝女鑑、かやうのたぐひよませならはしたまふべし」、また「よみならわしてよきもの、ひらかなの列女伝、ひらかな三綱行実」(巻五)と結論して、見事に当時の女訓書の手引の役も果たしている。すなわち、たんに不統一、雑多では済ませないものがあるのである。その点をもう少し、著者に強調してもらいたかつたと思う。

本書の書評として、以上いろいろの注文を申し上げたが、本書が既述のごとく仮名草子の女訓物の諸書をまとめ、始めてその精査に當つたということは劃期的であり、著者の努力を多とすることに変わりはない。ただ一般に「女訓文芸」というものになじみが無く、啓蒙的な「女訓文芸」のさらに啓蒙が必要と思われる段階でもあるから、「総説」で女訓物研究の必要性を説いておかれたら良かったと思う。女訓物は、その後「諸国心中女」「艶道通鑑」「当世操車」と続く近世小説の一系列を作り、その意味で仮名草子の果たした役割も大きかつたのであるから、堂々とその研究の意

義を誇示して、学界啓蒙の役も果たしていただきたかつたと思うのである。

(昭57・2 桜楓社刊 A5判 四三六頁 一二〇〇〇円)

暉峻康隆著『西鶴新論』

長谷川 強

近世文学の研究の中で、戦後めざましい充実発展を示したものの一つが西鶴研究である。その戦後三十余年間の西鶴研究の牽引力として活躍し、現在も活躍を続けておられるのが暉峻康隆博士である。昭和二十三年・二十五年に出た『西鶴評論と研究』上・下がひき起した反響については今更改めて述べるにも及ばぬ事であるが、戦後の西鶴研究の関門となつた書物であつて、後統の研究者の西鶴観には、大なり小なり何らかの意味でこの書物が投影しており、その批判また肯定の交錯のうちに、各自の西鶴像を刻む事になつたといつてよいのではなからうか。

しかし『西鶴評論と研究』刊行後三十年の年月の間には、博士が編者の一人として完遂された『定本西鶴全集』の刊行があり、新資料の出現、年譜・書誌調査・注釈等の整備、西鶴の生きた時代の歴史的・社会的研究の進展といった事情があり、その補訂の必要という事は、西鶴の全活動を覆い、しかも今日の研究の先駆的位置に立つた書物としては避けられぬ事ともいえよう。今回出刊の『西鶴新論』は、まえがきによると、『西鶴評論と研究』の